

読解力向上のための授業提案と分析

—「光と風からもらった贈り物」（高橋世織・光村『国語1』）の場合—

田中 宏幸

キーワード：宮沢賢治「高原」、方言詩、枠組み作文

1. はじめに

PISA 調査や全国学力・学習状況調査によって、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」については一定の成果が認められるものの、その知識・技能を「活用」する力に課題があることが判明した。この結果を受け、中教審答申（2008）では、言語が「知的活動（論理や思考）」及び「コミュニケーションや感性・情緒」の基盤であることを重視し、「各教科等における言語活動の充実」を強く求めることとなった。さらに、新学習指導要領中学校国語（2008）においても、「言語活動例」を「内容(2)」に位置づけるなど、生徒主体の言語活動を一層活発に行うことが求められるようになった。

このように言語活動の活発化が謳われるのは大いに歓迎すべきことであるが、「読解力の向上」に結びつく言語活動とはどのようなものであろうか。また、実際の国語教室においては、この課題にどのように取り組んでいけばよいのであろうか。本稿においては、高橋世織「光と風からもらった贈り物」（中学校教科書『国語1』光村図書、2006）を用いた公開授業（2008年6月）^{*1}に基づいて、「詩の読解を踏まえ、表現活動に転化していく授業」を提案し、読解力向上のための授業の工夫について分析を加えることとする。なお、ここでいう「読解力」とは、いわゆる「PISA型読解力」を指す。即ち、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」の三段階と、自分の考えや思いを人に伝えていく「表現力」を含み込んだ概念である。



▲ノートルダム清心女子大学の
田中宏幸教授による国語の公開授業

授業改革モデル研究会の開催

県教育委員会では「授業改革支援事業」の一環として授業改革モデル研究会を3会場で開催しました。この研究会は、公開授業や研究協議会を通して、参加者が自らの授業を振り返り、授業改善の具体的なプランを考えること、そして各学校での授業研究の充実を図ることを目的としています。6月24日には、倉敷市立庄中学校で約100名の教員の参加により、大学教官による公開授業と参加者同士が主体的に意見交換を繰り返す参加型研究協議会が行われました。

『教育時報』2008年8月号（岡山県教育委員会）

2. 授業仮説

(1) 生徒の実態（生徒観）

今回の授業対象者は、一般的な公立中学校1年生である。全国学力・学習状況調査の結果、岡

山県においても、「表現の仕方の特徴をとらえて読む問題」に課題があり、「自分の思ったことや考えたことを適切に表現する力が不足している」という状況が明らかとなっている。学級担任によれば、当該学級も例外ではなく、素直で明るい生徒が多いが、積極的に発言したり、記述したりすることが少ないという。

しかも、今回は、多数の参観者に見守られながら、初対面の教師とともに学ぶ授業である。とすれば、授業の進め方に一層工夫を凝らし、伸びやかな気持ちで授業を受けられるように配慮する必要がある。また、どの生徒にも理解できる読み取りの方法と記述の方法を伝え、学んだことを活用させるように導かなければならない。

(2) 学習材の特徴（教材観）

「光と風からもらった贈り物」は、本教科書においては、年度始めの単元「野原はうたう」を発展させ、詩の単元「豊かな言葉」として扱うように位置づけられた解説文（書き下ろし教材）である。筆者（高橋）は、宮沢賢治の詩「高原」*²を読み解きながら、賢治の詩の世界を「人間と自然が共生する世界」とであると指摘し、様々な「朗読」を試みようと呼びかけている。

だが、本解説文は、筆者の思いが先走りしているのか、詩についても、賢治についても、中学生にわかるように説明されているとは言い難い。中学生にとっては、原詩を理解するよりも、解説文を読み取ることに骨が折れ、賢治のものの見方や考え方を実感することに繋がりにくいのである。とすれば、高橋の解説文に頼るのではなく、原詩そのものの構成や表現方法を丁寧に分析することが必要となろう。

さて、詩「高原」の特徴は、次のように整理できる。

- ①用語：賢治が親しんだ花巻地方の方言で書かれている（文末表現や呼称など）。
- ②文体：助詞や主語が省略され、話し言葉風の文体となっている。
- ③題：題が、詩の第1行としての役割を果たし、詩全体を方向づけている。
- ④構成：前半「高原の情景」と後半「自分の様子」が、感嘆詞「ホウ」によって有機的に結合されている。
- ⑤心情：片仮名で記された感嘆詞「ホウ」が、「自然と自己とが一体化した世界」を発見した賢治の喜びを象徴している。
- ⑥描写：高原を描写する素材として光と風に着目するなど、賢治の五感（特に視覚・触覚・聴覚）が生かされている。
- ⑦比喻：高原を「海」に、自分を「鹿踊り」に喩えるなど、隠喩を活用している。

鹿踊り だちやい	髪毛 風吹けば	ホウ	やっぱり 光る山だ たじやい	海だべがど おら おもたれば	高原
-------------	------------	----	----------------------	----------------------	----

(3) 指導上の重点事項（指導観）

この詩の読解にあたっては、まずは、原詩を視写*³する時間を確保して、一語一語に注目させるようにしたい。書き写しながら、語感を確かめていくのである。

次に、省略語を補ったり、共通語（あるいは学習者の生活語）に置き換えたりする作業が必要になろう。詩をいったん「散文化」するのである。詩の鑑賞にはやや迂遠な道であるが、馴染み

にくい詩の場合には必要な手順であると思われる。

さらに、読み取り学習の発展として、原詩を下敷きにした「リライト学習」を設定し、獲得した知識を活用できるように進めたい。詩の内容と表現上の特徴について共通理解ができた上で、作詩に転じていけば、書けそうだという見通しを持たせることができ、表現意欲を喚起することもできよう。「高原」の場合、詩の構成、修辞法、分量において負担感が少ないので、書く内容と方法の発見に導きやすく、ほぼ全員に達成感を得させることができると期待される。

このように、読み取りの過程や発展学習の過程において、「書くこと」を積極的に取り入れていくことによって、作品そのものを深く読み味わうように導くことを、授業づくりの基本コンセプトとするのである。

以上の考察を踏まえて、今回の指導計画（全2.5時間）を、次のように組むことにした。

- ・第一次（第1時）児童詩「かわいそうな自分」によって発想を柔軟にし、方言詩を創作する。
- ・第二次（第2時）詩「高原」を読解し、賢治のものの方や表現の特徴を理解する。（公開授業）
- ・第三次（第3時）詩「高原」の表現技法を活用して、自分が発見した自然の不思議を詩に表す。

3. 実践上の具体的な課題と方策

(7) 動機づけとオリエンテーション（第一次）

前述したように、今回は飛び入り授業である。初対面の生徒と生き生きとした授業を展開するには、自己表現しやすい人間関係を短時間に形成することと、学習への動機づけを図ることが、通常の授業以上に強く求められることとなる。

そこで、本授業（公開授業の前時）においては、津軽地方の方言によって書かれた4編の児童詩「かわいそうな自分」を導入段階の学習材として用いることとした。方言詩人・伊奈かつぺいの指導によって生まれた次のような詩*4である。（4編のうち2編だけを挙げる。）

どうせおらだっきゃ 背は低いし 顔はメガネザルだし 全然モテない したばって 顔が不細工でモテないので 嫌いな人に 好きになられる心配もないです だから僕は将来独身で過ごします 独身でいると 保険料も一人分なので安いです それに子どもや奥さんに合わせなくて 自分の好きな過ごし方ができるので とつても幸せです、てが。	…… どうせおらだっきゃ、わすれんぼだ。 きのうの宿題忘れるし、 自分の誕生日も忘れるし、 何ていう県に住んでるかも忘れる。 なんていう国に住んでるかも忘れるし、 なんていう星に住んでるかも忘れる。 したばって、 ケンカしたこと忘れて仲良くなるし、 先生にしかられたこと忘れて勉強できるから、 忘れるのもいいことだ。 でも、昨日の夜食べたカレーの味だけは忘れ ない、てが。
--	--

（傍線引用者）

これらの詩は、三つの表現語句（「どうせおらだっきゃ」という書き出し、「したばって」という逆接の接続詞、「てが」という結び）が指定されて、生まれたものである。型を用いることで、①日常に根ざした言葉を用いた表現、②短所を長所として捉え直す発想の転換、③ホラを吹

いて「オチ」をつける笑い、が実現したのである。他者を傷つける陰湿な笑いではなく、からりとしたユーモアを生み出せる点や、生徒たちの自己肯定感を育ていける点に、創作指導法としての魅力を見出すことができる。

この指導法を応用して、岡山弁で表現させることにすれば、恥ずかしさを感じることも少なくなり、自己を表現しやすくなるであろう。また、お互いの表現を交流することで温かい人間関係を形成することもできるようになるだろう。

なお、今回の授業においては、津軽の小学生の4編の詩を示して、そこに「共通する因子」（三つの表現語句、前半と後半の内容の対比、ユーモアの精神）を発見させる、という学習課題を挟み込むことにする。このように作品構造を見抜く目を育てることが、今回のメインテキストである「高原」の読解にもつながるのである。

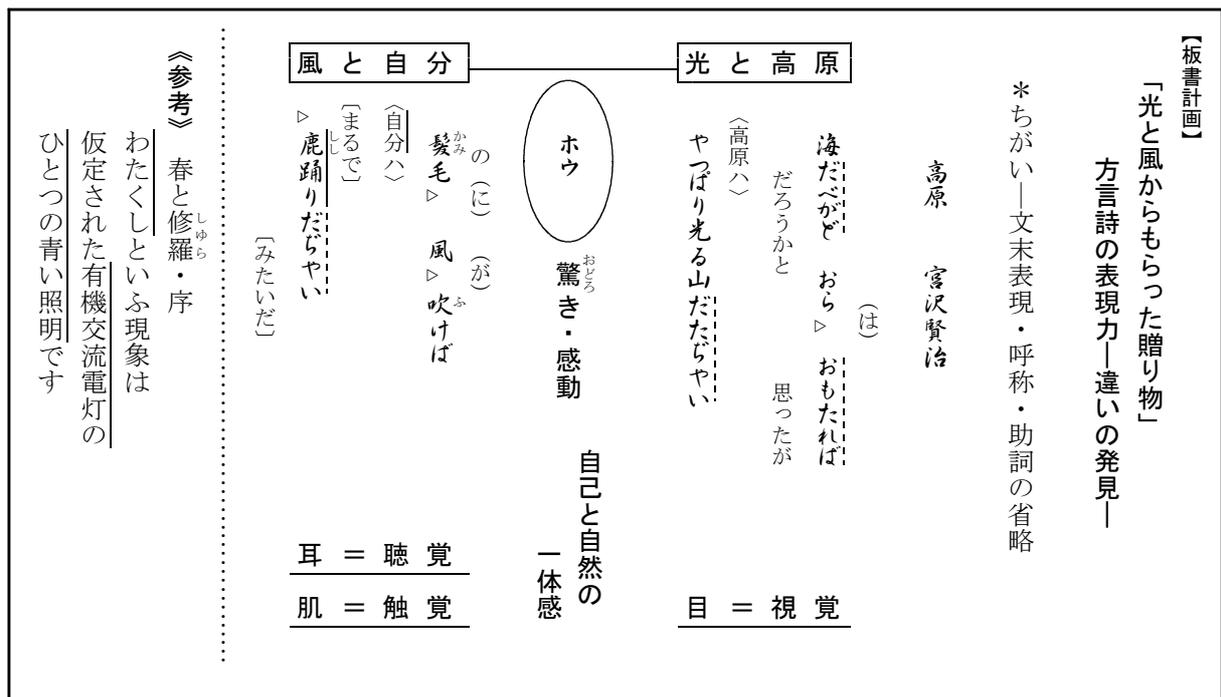
(イ) 読解の工夫（第二次）

作品の読み取りに関しては、「読解作業を主体的に進めるように導く手立て（学習課題や発問など）」と、「学び合いや話し合いの質を高める手立て」が主要な実践課題となる。

㊤ 主体的読解作業に導く手立て

生徒が主体的に読み進める姿勢をもてるようにするには、適切な学習課題を提示することが欠かせない。また、その学習課題を解決するための「考え方」や「作業方法」を明確に示すことが必要である。そこで、本授業では、第一次では「共通点の発見」、第二次では「違いの発見」という学習の方向性を明示することにした。

また、読み取りに必要な「助詞や主語の補充」については、ノートと板書を利用しながら、空欄補充型の傍注^{*5}をつけさせることにした。つまり、板書した本文に「▷」印と括弧とを書き加え、その空欄に適語を補充させていくのである。さらに、語釈やキーワードを書き込んでいけば、下記の板書計画のように、作品構造を一覧できるようになる。^{*6}



⑥ 学び合い・話し合いの質を高める手立て

学び合いや話し合いを質を高めるには、まず一人一人が自分の意見を持つようにしなければならない。そのためには、課題を具体化した上で、〈自分の考えを書く〉→〈小グループで意見交換する〉→〈全体で話し合う〉という手順を踏むようにする必要がある。

音読の場合も同様である。まずは自分の読み（予想）を持たせたい。引き続いて小グループで読みの疑問を確かめ、最後に全体で読み方を確かめる。このように、常に問題意識をもって学習に取り組むように求めるとともに、学習者間の意見の共通点や相違点に気付かせ、学び合いへの意欲を高めたい。

さらに、学び合いによって作品の読みの質を深めるには、複数のテキスト（例えば、詩集『春と修羅』の「序」や、童話『鹿踊りのはじまり』）と比べ読みさせるといった指導法を想定することもできる。だが、限られた時間の中で情報過多になっては却って混乱を招く恐れがあるので、今回は取り上げないこととした。

(ウ) 表現へ発展させる手立て（第三次）

③ 「想」の形成を促す

表現活動へ発展させるには、「何を書くか」「どう書くか」の2点について見通しが持てるように導かなければならない。その点、第一次の「方言詩」は、自分の欠点を長所に転じるという構成が明確であり、「言い回し」も具体的に示されているので、比較的容易に創ることができる。だが、第三次の「リライト」はかなり困難なものとなる。テーマが漠然としているし、「言い回し」をそのまま用いることはできないからである。

そこで、①テーマを「自然と一つになった私」（又は「私の見つけた自然」）と明確化する。②構成は、「感動した自然の様子」と「自分の様子」を何らかの感嘆詞（ホウ、アア、等自由に考える）でつなぐこととする。③比喩については、できるだけ「隠喩」を使うように推奨する。それでもなお詩想の湧いてこない生徒がいると予想されるので、④モデル詩（指導者自作の5編）を用意し、直喩の典型である三好達治「土」とともに示すこととする。

④ 作品の評価とフィードバック・交流

表現活動を活性化するには、作品への評価を伝えたり、交流を図ったりすることが欠かせない。

そこで、評価については、座席表形式に整理した学習者の実態（日ごろの学習状況・授業感想・作品内容等）を活用して個別の対応を図ることとする（資料1）。また、作品提出の翌日には代表作を紹介して、表現意欲を高めるようにする。（その際、最優秀作だけでなく、国語の苦手な生徒の佳作も取り上げ、賞揚するように配慮する。）

評価規準は、第一次の「方言詩」については、①「自分の短所を長所に転じるという発想を生かしているか」、②「ユーモラスに表現できているか」とする。第三次の「リライト」については、①「自然と自分の一体感を捉えているか」、②「比喩（隠喩）を用いることができているか」とする。

4. 単元目標と指導計画

以上のことを再整理すると、次のようになる。

(1) 学習目標（生徒に示す具体的なめあて）

- ①類似の詩（児童詩）を比較し、表現上の共通点を見つけることができる。（第1時）
- ②花巻方言と共通語や岡山弁との違いを発見することができる。（第2時）
- ③「高原」の前半と後半を比較し、対象の違いと認識方法の違いを発見することができる。（第2時）
- ④方言詩を書いたり、原詩のリライトを作ることができる。（第1時・第3時）

(2) 指導目標（指導者として生徒に求めたい学力）

- ①複数の学習材を重ね合わせ、類似のものから共通や相違点を発見する認識力を高める。
- ②他者を見下して笑うのではない上質のユーモアを実感させる。
- ③短所を長所に転換できる発想の柔軟さを育てる。
- ④共通語との比較や共通語への書き換えによって、文末表現や助詞や副詞の働きを再認識させる。
- ⑤賢治の自然や人間に対する捉え方を理解し、ものの見方や感じ方を広げさせる。
- ⑥比喩によって物事を捉える詩的認識力を育てる。
- ⑦進んで表現・発表しようとする態度を育てる。

(3) 学習指導案

■第一時 学習指導案（2008年6月23日第3校時実施）

目標	○少年詩の特徴を分析し、その特徴を生かした方言詩を創作する。		
時間	学習活動	主な発問・指示・支援	留意点・評価の観点
導入 5分	①担当者と出会う。 ②目標を確認する。	・折句による自己紹介 ・「方言詩の○○力」（板書）	・「○○力」を空欄に
展開 30分	1 児童詩（4編）と出会う。 ①範読を聞く。 ②4編の共通点を発見する。 ③自分の意見を書く。（2分） ④班で話し合う。（3分） ⑤発見したことを共有する。	・「弘前」の読み方を確認 ・「津軽」の説明 Q「四編を比較して発見したことを五つ挙げよ。」 Q「津軽弁を岡山弁に言い換えよ。」	○形式面からの発見 ・書き出し「どうせおらだっきゃ」 ・「したばって」（逆接） ・結び「てが」（オチ） ・「し」の反復→リズム ○内容面からの発見 ・短所を長所に転換 ・誇張した面白さ ・主題（自分の短所）
45分	2 方言詩を創作する。	Q「児童詩の型を用いて、詩を作れ。」《型》（板書） ・どうせうち（おれ）やこ… ・じゃけど… ・…、て言うたりして。	・岡山弁を用いてみる。 ・ウソを書いてもよい。 ・原稿用紙配付
結び	3 今日の学習を整理する。 ①本時の目標を再確認する。	Q「目標の空欄に何が入るか。」 A「魅力」「表現力」	・一語で表す。 ・理由を補足説明する。
	②今日の感想を書く。		・自己評価感想用紙配付

50分	③次時の学習に関心を持つ。	D「詩『高原』を共通語や岡山弁で訳すので、何度も読んでくこと。」	・詩が完成していない者は、明朝提出。 ・ボールペン持参
-----	---------------	----------------------------------	--------------------------------

■第二時 学習指導案（2008年6月24日第5校時実施・公開授業）

目標	○詩「高原」を読解し、賢治のもの見方や表現の特徴を理解する。		
時間	学習活動	主な発問・指示・支援	留意点・評価の観点
導入 5分	①級友の方言詩を味わう。 ②本時の目標を確認する。	「方言詩の表現力」（板書） —違いの発見—	・優秀作7編程度紹介。
展開 15分	1 「高原」の韻律を味わう。 ①詩を視写する。(2分) ②ペアで音読しあう。(1分半) ③指名読み(1名) ④範読を聴く。(1分) ⑤長岡の朗読を聴く。(1分)	・ノートに2行空き。ボールペンで清書。 ・読みに問題意識を持たせる。 ・音読した感想を尋ねる。	・早く、丁寧に書く。 ・時間制限を設け、緊張感を維持する。 ・ゆっくりと範読する。 ・CD（長岡輝子）
25分	2 詩「高原」を訳す。 ①共通語や岡山弁との違いを探す。 *違いを三つ探す。 *行間に書き込む。 ②個の意見→班→全体で発表。	Q「岡山弁とどこが違うか。」 ・文末・呼称・助詞の有無 ○板書に空欄を提示する。 ・助詞「は」「に」「が」の補充。 ・副詞「まるで」の補充。	・文末の違いは容易。 ・助詞の省略もほぼ可能。 ・必要に応じて解説文も利用させる。 ・補充事項によって、括弧を使い分け。(板書)
40分	3 詩の構造を読み解く。 ①前・後半の描写対象の違いを知る。 ②班で話し合う。(2分)	Q「『ホウ』の前後を比べて発見した違いを二つ挙げよ。」 ・描写対象(何について) ・主語の補充。(空欄設定)	・主語の補充は困難。 ・前半＝光と高原 後半＝風と自分
40分	4 賢治の認識方法を知る。	Q「体のどこを使って感じ取っているか」(認識方法) ・賢治が全身で自然と一体化しようとしている様を想像する。	・前半＝目(視覚) 後半＝肌(触覚) 耳(聴覚)
45分	5 賢治の心情を想像する。 ①「ホウ」の一語に込められた驚きの気持ちを想像する。 ②「自然と自分との一体感」を想像する。	Q「ホウ」は、どういうときに出す言葉か。皆なら驚いたとき、どのような声を出すか。 Q「賢治は何に感動しているか」	・「驚き」以外の解答も許容。 ・自己と自然の一体感 ・自然に生かされている自分
48分	③『春と修羅』序文と重ね読みをする。(3行だけ視写) ④「高原」を朗読する。	・『春と修羅』「序文」を紹介。 ・自分を電灯の照明に喩える発想に注目させる。	*時間が不足すれば、口頭で趣旨を伝える。
結び	①今日の感想を書く。 ②次時の学習(詩の創作)に		・自己評価感想用紙配付

50分	関心を持つ。		
-----	--------	--	--

■第三時 学習指導案（2008年6月26日・指導者＝学級担任）

目標	○詩「高原」の構成と隠喩を利用して、詩を書く。		
時間	学習活動	主な発問・指示・支援	留意点・評価の観点
15分	<p>1 詩の作り方を理解する。</p> <p>①テーマ「自然と一つになった私」または、「私の見つけた自然」を確認する。</p> <p>②今回の詩の基本構成を確認する。</p> <p>③比喩表現については、できるだけ、直喩を隠喩に変えてみる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話題になる体験や思いついた語句をメモさせておく。 ・自然と自分を対置し、両者を「ハウ」などの感嘆詞でつなぐ。 ・直喩を隠喩に変えてみよう。（「まるで」を削ってみる。） 隠喩の例「松井はゴジラだ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートとモデル作品を配付。 ・例文を活用して、理解できているかどうかを確認する。
30分	2 詩を書く。	・できるだけたくさん書く。	

*なお、2週間後、田中より生徒個々へメッセージ（作品評等）を送り、この学習を終了した。

■モデル作品／詩を作る—「自然と一つになった私」または「私の見つけた自然」—

(感動した自然の様子)。ハウ、(自分の様子)
(自分の様子)。○○、(見つけた自然)
《比喩表現》 △△は、まるで○○みたいだ。(直喩) → △△は、○○だ。(隠喩)

<p>⑥ ネズミがすもうを取っているんだ。 * ②～⑥は、田中による習作。</p>	<p>⑤ テントの中 そつと耳をすませた。 オオ、 アリのささやきが聞こえてきた。</p>	<p>④ 透明な私が空を歩いている。 ハウ、 満天の星だ。</p>	<p>③ ベランダに出て星を見た。 一面に広がる芝生やった。 ヨイショ。 ねころがったら、自分が芝生になつてもた。</p>	<p>② 夕日が燃えとるのう。 わしの町もわしの体も真つ赤じゃ。 オヤ、 わしの体は、ぼつけえ赤けえさなぎじゃ。</p>	<p>① (直喩の例) 蝶の羽をひいて行く ああ ヨットのようだ (三好達治「土」)</p>
---	---	---	---	--	--

4. 授業の成果と今後の課題

今回の授業提案は、「詩の読解を踏まえ、表現活動に転化していく授業」であった。リライトを視野に入れることによって、原詩の主題だけでなく構成や用語をも精緻に分析するようになる

とともに、自らの表現に生かせるようになるというところに、この指導法の意義が見出せる。

では、生徒たちは、この授業をどのように受けとめたのであろうか。

(1) 生徒による授業評価（回答総数26名／資料1・2）

今回の授業について、生徒たちは次のように自己評価した。

(ア) 授業内容の理解度

	よくわかった	大体わかった	よくわからなかった
第1時（方言詩）	19名(73%)	6名(23%)	1名(4%)
第2時（高原）	21名(81%)	5名(19%)	0名(0%)

(イ) 発言意欲

	どんどん挙手	できるだけ挙手	あまり挙げられず	全く挙げられず
第1時（方言詩）	3名(12%)	9名(35%)	14名(54%)	0名(0%)
第2時（高原）	6名(23%)	10名(38%)	8名(31%)	2名(8%)

(ウ) 表現意欲の喚起

	書きたくなった	どちらとも言えない	書きたくない
第1時（方言詩）	15名(58%)	10名(38%)	1名(4%)
第2時(リライト)	17名(65%)	8名(31%)	1名(4%)

この三つの表から明らかなように、授業内容の理解度は、「大体わかった」を含めると、第1時96%、第2時100%となった。また、表現意欲の高まった生徒（「書きたくなった」と答えた生徒）は、第1時では58%であったが、第2時では65%と向上した。

しかも、日頃はほとんど発言しない女子生徒が自ら挙手したり、国語の成績が芳しくない男子生徒がリライトを7編も提出したりするという現象も生み出すことができた。

(2) 生徒作品例

■第一次の方言詩（「どうせ自分なんて」）

第一次で書き上げられた方言詩は、次のようなものであった。いずれも逆転の発想を生かし、ユーモラスな岡山弁で表現できた例である。

<p>どうせおれなんて 口はわりいーし、 目は猫みてえーじゃし、 お金ねーし、 いっつも、腹減ってるし、 いっつも、ねみいーし、 いっつも、不安じゃし。 じゃけど、 お金がないけん、不良にカツアゲされんし、 口が悪くて、目が猫じゃけん、猫としやべれるし まんぷくになってねてるおれを想ぞうするとたのしいし、 友だちのありがたみがわかってステキじゃもん、 なーんちゃって。</p> <p>（男子）</p>	<p>どうせうちやこ 背は低いし スポーツできないし 背が低いので ほかの人に比べて 大またで走らないといけないし 背が低いと不便なことばかりだ じゃけど、 頭だけはかしこいし いっつもテストは百点で、 悪いことなんてひとつもない とにかく体なんて 関係ない！ て言うたりして</p> <p>（女子）</p>
---	--

■第三次のリライト（「自然と一つになった私」又は「私の見つけた自然」）

<p>「うまれたての風」</p> <p>丘のぼって 風を聞いた かすかな 春のおい ホワー そうか ぼくは風になった (男子)</p> <p>……</p> <p>「もも」</p> <p>甘い 甘い この 愛らしい 笑顔 オワツ 僕の顔も ピンクだ (男子)</p> <p>……</p> <p>「風」</p> <p>私しかない家の中 強い風がふいていた ああ、 風は、孤独な私に 話し掛けてくれた。 (女子)</p>	<p>「空」</p> <p>空を見上げれば、 いつもより近く感じた。 あーあ 手に触れそうで、触れない。 あともう少しなのに。(女子)</p> <p>……</p> <p>「風」</p> <p>風が吹いた フー 服を通して 体に風がすきとおる わしは、とうめい 人間だ (男子)</p> <p>……</p> <p>「花火」</p> <p>バーン。 音がひびいて 花がさく その花は一しゅんにして かれおちる ああ、 自分がかかるまで 一生懸命生きよう！ (男子)</p>
---	--

第三次のリライトでは、上記のような作品が生まれた。いずれも、①「新鮮な着想で『自然との一体感』を捉えているか」及び②「隠喩を効果的に用いているか」という二つの評価規準において、A評価を与えたものである。

学級全体としては、①「自然との一体感」は、A評価8名(30%)、B評価18名(70%)、C評価0名(0%)となった。平凡な発想のものもあるが、全員が「ほぼ満足できる」状態となった。原詩の着想と構成を理解することができたと見なしてよいだろう。書くためのヒントとして示した「枠組み」(内容の構成案)やモデルも、ほぼ妥当なものであったと言える。方言詩の場合のように使用語句を指定しなくても、構成の仕方を捉えさせれば、新たな発想を促すことができるということである。

一方、②「隠喩の活用」については、A評価13名(50%)、B評価9名(35%)、C評価4名(15%)という結果となった。隠喩については、一例をワークシートに示しただけなので、成績にばらつきが出た。理解はできても、使いこなすことができなかつたのである。

(3) 問題点と今後の課題

本公開授業については、授業後の協議会等で参加者から感想を聞かせてもらうことができた。その多くは、授業のねらいと進め方に賛意を示してくれるものであったが、疑問点も寄せられた。

その一つは、助詞や主語を補って詩を「散文化」することへの疑問である。目の前の言語表現をそのまま受けとめ、表現を手掛かりに、言葉の飛躍の面白さや詩の世界の重層性(例えば、「高原」と「海」との取り合わせ、順接表現「おもたれば」が逆接的に用いられている論理の屈折、

「ハウ」が片仮名で表記されている意味など)を味わっていくべきではないかというのである。

また、「ハウ」の音読の仕方を考えさせ動作化させるべきだという提言や、音読にもっと時間を割いて方言のニュアンスや言葉のリズムを体感させるべきだという批判もあった。

これらは今回の授業提案が、「読むこと」よりも「書くこと」に重点を置いたものとなっているが故の批判であろう。それぞれに一理あるが、今回の授業提案の趣旨とは異なっているところが多い。今回は、「書くこと」をゴールに設定し、「書く」ために「読む」という学習を設定したものである。「書こう」とすれば、当然丁寧に読まねばならないし、書くことを通じて「読んだ内容」が定着していくことをねらったのである。

結果的には、生徒たちは、事後の感想で、「短い詩なのに、こんなにも意味があることに驚いた。これからは意味を考えながら詩を読もうと思った」とか、「賢治の詩にはいろんなことが隠れていた。言葉一つもそうでした。すごく深かった」と述べた。分析して読む方法を知るとともに、詩の表現者となることで、詩の一語一語を大事にして読むことを楽しんだのである。

今後は、「読み」が窮屈にならないように十分に留意しながら、詩を読み解く力を身につけさせるためには、「詩を読む際の着眼点」や「枠組み表現」をどのように設定すればよいかということが問題となる。さらに検討を続けたい。

【注】

- *1 本公開授業は、岡山県教育庁指導課より「授業改革支援事業」の一環として授業モデルを提示するように依頼を受け、2008年6月24日、発表者自身が、約100名の参加者の前で、倉敷市立庄中学校1年生27名を対象に行ったものである。なお、事前指導としてその前日にも授業を行った。本稿では両授業を考察対象とする。
- *2 「高原」は、高校教科書『探求国語総合(現代文・表現編)改訂版』(桐原書店、2007)にも採録されている。
- *3 視写することで読みを確かなものにする考え方は、青木幹勇の提案「第三の書く」に学んだ。
- *4 伊奈かっぺいが、NHKの番組「課外授業ようこそ先輩」(2006年9月9日放映)で行った授業。引用は、児玉忠「児童詩教育とユーモア」『小田迪夫先生古稀記念論文集』(大阪国語教育研究会、2008)による。
- *5 大村はまが古典の学習で使用した萩原廣道式の手引きにならったものである。
- *6 難波博孝(2008)が指摘するように、「高原」の最初の2行については多様な解釈が可能であるが、ここでは混乱を避けるために、その点に触れることを避けた。

【参考文献】

- ・青木幹勇『書きながら読む』明治図書、1976
- ・朗読CDブック『長岡輝子、宮沢賢治を読む』第一巻、草思社、1996年
- ・山根道公・山根知子編著『イーハトーブからのいのちの言葉』角川書店、1996年
- ・島田陽子『方言詩の世界—ことば遊びを中心に—』詩画工房、2003年
- ・浜本純逸「総合的学習と国語科教育」『国語の授業』181号、一光社、2004年4月
- ・阿武泉監修『読んでおきたい名著案内／教科書掲載作品13000』日外アソシエーツ、2008年
- ・難波博孝『母語教育という思想』世界思想社、2008年、pp. 115-119